
孤独な読心能力者

BRISINGR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独な読心能力者

【Nコード】

N7155Y

【作者名】

BRISINGR

【あらすじ】

人は薄っぺらい。俺が『能力』で最終的に導き出した答えだ。友情は儚い。漫画や小説のような仲間意識なんてあるはずが無い。自分の身に危険が迫れば平気で捨てる。結局は自分の身が優先だ。友達なんてただ利害の一致で付き合っているに過ぎない。人は自分に利益のない人とは付き合わない。愛情は脆い。親が子供を育てるのは国の義務と定められているからだ。なぜ自分の時間、夫・妻との時間を削ってまで面倒しかかけない子供を育てなければならない。育児のせいで会社の昇進すらできない。恋をして告白して付き合っ

ても、相手の新たな一面を見せいで嫌いになることだってある。
他にもあるのだが、あらすじがあまり長くても仕方ないので、この
辺で終了。

プロローグ（前書き）

模試をやっているときに、思い付いた駄作です。
よろしく願います。

え？粗筋に比べて前書きが軽い？
気にしないで下さい。

プロローグ

サイコメトリー
読心能力。

代表的な超能力の一種だ。

物体に触れることで人の心や物体の事象などを読み取ることができる超能力。

そう。触れるだけだ。

触れるだけで、相手の思考が分かる。

触れるだけで、相手の気持ちがる分かる。

触れるだけで、物体の構造が分かる。

触れるだけで、物体の扱い方が分かる。

この能力で分かることは未知数。

でも、それだけ。

人の喜び・悲しみ・怒り・楽しみ・苦しみ・焦燥・愛情・嫉妬など
数多の感情を知ってどうするのかは、その人の自由。

人や会社などの秘密・機密情報をどうするのかは、その人の自由。

分かった・知った事をどうするのかは、その人の自由。

人の感情を知った場合は？

笑うのか？

怒るのか？

泣くのか？

同情するのか？

励ますのか？

助けるのか？
黙ってるのか？

人や会社の秘密・個人情報・機密情報を知った場合は？
黙ってるのか？
脅迫するのか？

何も苦勞せず、ただ触れるだけで全てを読み取られる超能力。
それが、サイコメトリー読心能力の力。

現代は情報化社会と呼ばれている。
1つの情報が金にも変えられない価値を持つことがある世界。
1つの情報だけで世界全体を変えるかもしれない世界。

そして、超能力など妄想に過ぎないと言われている世界だ。

この物語は、サイコメトラー孤独な読心能力者の話。

第1話

中1の頃だった。

その頃はまだ（・・・）家族がいた。

両親2人に妹が1人の4人家族だ。

両親は共働きでほとんど家にいない。

家に居たとしても早朝か深夜かのどちらかだ。

その時間帯は俺と妹が寝ているので、滅多に会うことはない。

当たり前の話、小3の妹の面倒は俺が見ていた。

朝食や夕食の支度、掃除、洗濯まで俺がやっている。

これは俺が小5の頃に2週間みっちりかけて母から教えられたスキルだ。

母は仕事を休んでまで俺に教え、家事全般を任せた。その時は、学校すら休まされたが。

これには感謝している。

おかげで、今の1人暮らしで充分に役立っている。

ここからが本題。

ある日の学校が終わって放課後のこと。

俺が妹を連れて夕食の買い出しに行った。

「お兄ちゃん、早く！早く！」

横断歩道の向こうで、妹がこっちを手招きしている。

歩くのは性に合わなかったようで、先に走って行ってしまったのだ。信号は青。俺は横断歩道を踏み出して、妹のいる歩道へ渡ろうとする。

キキツキキキツ！！

甲高い音が辺りに響いた。

目を向けて見れば、トラックがが猛スピードでこっちに向かってきた。

いや、正確には妹のいる横断歩道に向かった。軌道からして妹にぶつかる。

妹はトラックには気付いているみたいだが、自分の身に危険が迫っていることには気付いてなかった。

直ぐに両足を動かして、横断歩道を走る。

俺が横断歩道を渡り切った時には、トラックはもう目前まで迫っていた。

妹はここに来てやっと状況を理解したらしく、泣きそうな顔をしていた。

俺は走った勢いを利用して、妹の身体を思い切り突き飛ばす。突き飛ばされた妹の顔が驚愕の表情で、こっちを見ていた。

ドンッ！！

次の瞬間、俺の視界がブレた。

第2話

あの事故で、俺は意識不明の重体になった。生きてるだけマシだな。ただ、もうこの時点で『能力』を得ていた。たぶん、あの事故のシヨックで発現したのだろう。今はそう思っている。どこの漫画や小説のお決まりパターンだと思った。でも、発現したものは仕方ない。

それは俺は病院のベッドの上で意識が戻った瞬間だった。

「ここはどこだ？」とか「俺は今どうなっている？」なんて考えている暇は無かった。

本当に突然 幾千幾万もの情報が頭の中に一斉に流れ込んできた。

「	頭の無事	」
「	脳は無事	」
「	腕は骨折	」
「	足は骨折	」

実際はこんなものではない。

脳や身体の詳細まで無事か怪我をしているかの情報が入ってくる。怪我をしている場合は詳細な情報が入ってきた。

まるで、身体の細胞の1つ1つから脳に向かって一斉返信されたような気分だ。

遂には、細胞の働きまでが頭に入ってきた。

さらに、身体の外的事まで情報として入ってくる。

もちろん、そんな膨大な情報を俺の脳が御せれるはずがない。

病室一杯に苦悶の叫び声が響き渡った。

動かないはずの両手で頭を抑えながら、ベッドの上で身体が勝手にのたうち回る。

暴れることで、身体のおちこちに貼付いていた点滴のコードや呼吸機が外れた。

「頭を強打」

「腕に過負担」

「足を強打」

新たな情報が付け加えられた。
その情報がまた俺を苦しめる。
さらに、身体が暴れる。

病室のドアが開いた。

叫び声を聞き付けた医師や看護師が入ってきたみたいだ。

医師と看護師数人で俺の身体を抑え付ける。

「内藤孝治」

「斉木香帆」

「鈴木鈴音」

「浜田優子」

今度は人の名前が流れ込んできた。

名前だけに留まらず、次々と情報が入ってくる。年齢・職業・住所・電話番号・家族構成などありとあらゆる情報がだ。そして、思考も。

頭がバンクしそうになった。

看護師全員で身体が押さえつけられた。

白衣を着た男性が右手に注射器を持っている。

俺の身体は押さえつけられているため暴れることはできない。ただ、

唸り声を上げるだけ。

プスッと注射針が刺された。

麻酔だったのだろう。

その後、俺の意識は再び闇に落ちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7155y/>

孤独な読心能力者

2011年11月26日19時49分発行